

最終章  
妖精ノ国  
【八雲／現代エンド】

見上げれば、夜空には赤い満月。

妖しいその光が、闇夜の中に佇む鹿鳴館をぼんやりと浮き上がらせている。豪華な門の前に立つ私を、バツスルドレスに身を包んだ淑女たちが追い越していく。

(……やっぱり、ドレスじゃなきゃ駄目だよね)

ちゃんとしたドレスだって持つてるのに、なんで制服なんか着て来ちゃったんだろう。思いきり浮いているのは百も承知だけど、いまさら着替えに帰るわけにもいかなくて。

(だって私は、チャーリーさんに会いに日比谷公園に行かなきゃいけないんだもの)

でも今夜開かれる鹿鳴館のパーティーには、八雲さんがいる。

(少しだけ。ほんの少しだけ……)

自分にそう言い聞かせながら、私は鹿鳴館のダンスホールを目指して庭園を歩いて行く。つかの間だけ、最後に夢を見るために。

「おい、今夜はマジックショーがあるらしいぞ」

「ほう、松旭斎天一か。最近よく聞く奇術師だな」

ダンスホールに入ると、一気に喧噪に包まれた。人に酔いそうになりながらふらふらと歩いていると、

「やあ、芽衣ちゃん」

「っ！」

背後から私の肩を叩いたのは、チャーリーさんだった。

「はは、驚かせてしまったようで悪かったね」

「ほ、ほんとにびっくりした」

まさか、こんなところで会えると思わなかった。てっきりチャーリーさんは日比谷公園にいて思っていたから。

「で、誰を探していたのかな？」

「え？」

「僕は君と、満月の夜に日比谷公園で待ち合わせしていたはずだ。でもおかしなことに君は今、僕との約束とは違う場所にいるようだからね」

（あ……）

「もしかしたら君は、誰か別の人と約束でもしていたのかな？　と思っただよ」

（違う、そうじゃないの。チャーリーさん）

でもなにを言っても言いわけのようになってしまう気がして、私は押し黙った。

「その人は、君にとって大事な人なのかな？」

なおも彼は、その話題で食い下がってくる。

「さあ、よく考えて。これは大切な質問だよ？ 君にとってその人は、現代での生活よりも大切なものなのかな？」

「それは……。よくわからない」

実はまだ迷ってる。

現代に帰らなきゃ……。と思いつつも、この時代に心残りがあるのもたしかだ。

「……へえ？ あんなに帰りたいたっていったのに？」

そう、私はつい最近まで、自分が現代に帰ることを選ぶと信じて疑わなかった。

(でも、どうして……。帰らなきゃいけないと思うんだろ？)

家族や友達が待っているから？

生まれ育った世界だから？

すべてを捨てるのは無責任だから――？

(じゃあ、私を好きになってくれたあの人を置いて帰ることも、無責任なんじゃないの？)

私がいなくなったら、あの人はどう思うだろう。

私がいなくこの世界で、私のことを探し回ったりするのかもしれない。

まさか私が違う時代に帰ったとは思わないだろうから。

(――そんなことさせたくない)

私を必要としてくれるなら、そばにいたい。

「誰か、大切な人ができた？」

私はうなづいた。まぶたの裏が熱くなる。

「その人と離れたくないんだね」

もう1度、うなづいた。

たったそれだけの理由で私はここから動けずにいる。私がもう少し大人なら、きつとこんな気持ちに振り回されたりしないのかもしれない。

「それなら、離れなければいいよ」

チャーリーさんは難なく答えた。

「離れたくなければ、離れなければいい。おそらくその人も君と同じことを思っているはずだ」

「……そんなのわからない。簡単に言わないで」

「いや、簡単な話さ」

「どんなに大がかりなマジックでも、タネあかしをしまえば仕掛けなんて拍子抜けするほど簡単なものなんだよ」

「……？」

説得力があるような、ないような。よくわからないたどえだった。

「信じられない？　じゃあ、これからすごいマジックを見せてあげよう」

「え？」

「芽衣ちゃんだけの特別サービスだ。今から、ここに君の大切な人が現れるからね」

「なに言ってるの」

そんなはずない。

現れるわけがない。

「心配しなくても大丈夫だよ。明治だろうが現代だろうが、どこにいたって彼は君のことを大切にしてくれるはずだから」

「チャーリーさんっ」

だんだんと喧噪が遠のいていく。人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

——赤い月だけが、暗闇を照らし出す。

（チャーリーさん）

私は何度も呼びかけた。

（教えて。あなたは誰なの？）

その問いに答える代わりに、彼はニヤリと道化師のような笑顔を浮かべた。

「幸せになるんだよ、芽衣ちゃん」  
ぱちんと、大きく指を鳴らした。

\*

「芽衣サン」

ぱちん、とシャボン玉が弾けたような感覚のあと。私の目の前には、八雲さんがいた。  
「ふふ、踊り疲れてしまったのですか？」

きらきらとした光の粒が舞う鹿鳴館のダンスホール。優雅な音楽と心地のいい喧噪の真ん中に、八雲さんがいる。

(……チャーリーさんは?)

まばたきをするわずかな時間のうちに、彼は私の目の前から消えてしまった。なんの余韻もないまま、あっさりと。

最初から存在すらしてなかったと言わんばかりに。

「やはり、はしやぎ過ぎたのでしょうか。……貴女という方は、少しでも目を離すとすぐにどこかへ飛んでいってしまおう」

そうやって、八雲さんは私の手を取った。人の流れに逆らい、ドアのほうへと歩いて行く。オーケストラの音色から逃れるように、迷いなくどこかを目指す。

鹿鳴館の外に出ると、赤い満月が私たちを見下ろしていた。錆色の月光が照らす庭園を、八雲さんはたしかかな足取りで踏みしめていく。

（どこに行くのかな）

これからどこか旅にでも出るような軽快な歩調。期待と好奇心が、彼の背中を押しているようにも見えた。

「……八雲さん？」

「以前、お話したでしょう。私が従兄弟と探したフェアリー・リングのことを」

私は頷いた。

その話なら覚えている。イギリスの民話に出てくる、妖精の国への入り口だ。

「また新たなフェアリー・リングを見つけたのです。貴女の世界につながる、大きなリングですよ」

（私の世界？）

「ふふ、楽しみですね。新しい土地に行く時はいつも心が浮き立ちます。いったいどんな世界が待っているのでしょうか？ 帰り道のエスコート役も、どうぞ私におまかせください」



い。決して貴女を迷子にはさせません」

（そっか……帰るんだ）

私は私の世界に帰るんだ。八雲さんと一緒に。

だったらなにも不安はない。

いつも私の手を引いてくれていたのは、八雲さんだから。

「ふふ……そうです。しっかりつかまっけていてくださいね」

帰りたいたい、八雲さんと一緒に。2人で手をつないで、あの月に向かって。

光の輪をくぐり抜けて、私の世界へ——。

\*

——まぶたの向こうに、やわらかな光を感じた。ざわざわと人の気配。子どもたちの笑い声。

（ここは……）

私は、この場所を知っている。あれは、今からちょうど1カ月前——

「さあ、お立ち会いお立ち会い！ 手前ここに取り出し出したる陣中膏はこれ、ガマの油。ガマと言ってもそんなじよそこらのガマとは物が違う！」

「ハイご通行中の皆様、容貌奇妙にして珍妙なるこの娘、親の因果が子に報い、生まれ出たるはへび女！ お代はあとで結構だよ、ハイ入って入って〜」

——私が明治時代に飛ばされてしまった、あの夜。

あの夜に訪れた縁日だ。

そして私の隣には、八雲さんがいる。

彼は私の手を握りしめ、すでになにかを悟ったような顔で、私を見下ろしていた。

(どうして、ここに……?)

ただ1つわかるのは、ここは現代だということ。

どうやら私と八雲さんは、チャーリーさんの不思議なマジックによって、2人一緒に現代へと飛ばされてしまったらしい。

そして現代に帰ってきた私は、チャーリーさんの言葉どおり、すべての記憶を取り戻していた。

私は東京都のとある普通高校に通う、女子高生だ。

成績は中の中、多くはないけど少なくとも友達に囲まれ、平凡な高校生活を送って

いた。

家族構成は、両親と妹が1人。親は骨董品屋を営み、私は幼い頃から古いものに囲まれて育った。

飴色の茶箆筒に細竿の三味線、紫壇の文机。切子細工のガラスの灰皿。そんな古いものの匂いや手触りが大好きだったことを、現代に帰ってきてから思い出した。

\*

——それから数年後。

八雲さんと私は今、島根県松江市にある一軒家で暮らしている。

古い武家屋敷を改築した、いかにも八雲さん好みの日本家屋だ。

彼は大学で教鞭を執るかたわら、謎のホラー作家として小説を出版したり、ライフワークである日本研究で論文を発表したりしている。

要するに、生活自体は明治時代にいる頃とほとんど変わりがない。

……八雲さんは現代にやって来た頃、よく『近代化とともに日本らしさを失っている』と、この国の行く末を案じていた。

今でも、昔ながらの日本の風景が失われていくたびに、彼は胸を痛めているけど。八雲さんは言う。

『私は日本人の誰よりも日本を愛しています』と。

彼は彼の中にある美しい日本の姿を、後世に残していこうと決めたようだった。

……八雲さんはもう、明治には帰らない。

八雲さんの目をとおして描かれた、100年以上も昔の日本の光景は、本というかたちで現代にもしっかりと残されている。

——そして八雲さんが、キャシーとのつべらぼうの事件を通じ、明治時代で書き上げた『葬られた秘密』という小説。

このお話も、今この時代にしっかりと在り続けている。

私の仕事は、今日まで残されてきたものを、八雲さんとともに次の世代に伝えていくこと。この『妖精の国』を誰よりも愛してくれた、八雲さんとともに——。100年後、200年後のこの国へと、愛を込めて。

\*

「……はあ。やはり出雲産の煎茶は美味しいですねえ」

濃いめにいれたお茶をゆっくりと味わうと、八雲さんは満足そうな吐息をついた。こうして縁側で2人並んでお茶を飲むのも、今ではすっかり習慣になってしまった。

「宍道湖で採れたしじみの佃煮も、お茶請けにはぴったりです。我が家は地産地消の精神ですね！」

「ふふ、そうですね」

私たちが暮らすここ島根県の松江市は、八雲さんが以前、東京に来る前に住んでいた想い出の土地でもある。

『八雲』というペンネームも出雲の枕詞なのだと、いつか教えてもらったことがあった。

「しかしこのあたりは1000年前とくらべてずいぶんと様変わりしましたが……。古き良き日本の名残は、探せばまだまだあるものですね」

八雲さんにはにっこり笑うと、指先で愛おしげに縁側の縁をなでた。

長年磨き込まれた床板は手触りが良く、滲み出した天然の樹脂によってとろりとした優しい光沢を放っている。

「このジャパニーズ・サムライが住んでいたという武家屋敷も、築1000年は経ってい

るだろうに、まだまだ現役とは恐れ入りました。やはり日本の職人技術はファンタステックです！ さすが八百万の神々が住む国ですねえ。マイ・フェアリー？」

「あの、その呼び方はどうかと……」

つい、突っ込みを入れてしまう。

八雲さんはたまに私のことを『フェアリー』と呼ぶ。これ以上恥ずかしい呼び名も、そうそうないだろう。

「ああ、失礼しました。貴女はこのニックネームがお気に召さないのでしたね」  
ちよつと拗ねたように言ってから、彼はぽんと手を叩く。

「……そうですね、ではこれから貴女をママさん、とお呼びするのはいかがでしょう？」

「いえ、ママじゃないですし」

「しかし、いずれママになるかもしれないではありませんか」

「……っ、それは、まあ……」

いずれはそうなるかもしれないけど、今は違う。なんだか急に恥ずかしくなってきた。しまった。

「まあ、急いで決めることはありませんね。ゆっくりといきましょう」

「はい」

いつかは八雲さんと私の子供が……なんて未来を想像するだけで、くすぐったいような気分になる。

でも、彼の言うとおり、急ぐことなんてない。私たちはこれからもずっと一緒なのだから。

「……ああ、そういえば今朝、松江城の周辺を散歩していたら人力車を見かけたのです。今の時代には自動車や新幹線など、便利な乗り物がたくさんあるというのに、なぜ人力車なのでしょう？」

謎を前にすると探求せずにはいられないという彼の旺盛な好奇心は、現代に来てもちっとも変わらない。

「その人力車は観光用なんですよ。今は使われてない古い物って、めずらしくて逆に目新しいというか。現代の人には新鮮に映るんです」

「ほう、なるほど……今の若い方々には、古いものが逆に新しく見える、と……」  
ふところから取り出したメモ帳に夢中でペンを走らせるその瞳は、キラキラと輝いている。

「ふふ、実に嬉しい話ではありませんか。……正直私は、この時代にやって来た当初、近代化の一途をたどった日本の姿に一抹のショックを覚えました。ある程度覚悟してい

たとはいえ、たかが100年程度でこんなにも、古き良き

日本の風景は失われてしまったのか、と」

私と一緒にいることを選んでこの現代へと来てくれた八雲さん。

大好きな彼に捨てさせてしまったものを考えると、今も心が痛む。

だけど——。

「ですが、日本人が古くて良いものを尊重する心は、近代化をきわめた今でもしっかりと受け継がれているのです。かたちあるものはいつかなくなっても、私は日本人の清く健やかな精神を文章という手段で残していきたい」

「八雲さん……」

「それが私の使命ではないかと、この頃、とみに思うのです」

まるで私の秘かな後ろめたさを吹き飛ばすかのように。八雲さんはその聡明な顔に、確信に満ちた明るい笑みを浮かべていた。

「……ふう。こうして縁側でお茶を飲んでみると、藤田さんが乱入してきそうですね」

「ふふ、そうですね。藤田サンは今ごろどうしていらっしやるのでしょうか」

「まあきつと、お得意のサーベルを振り回しながら、例の上から目線な態度で近隣住民たちを威嚇しまくっているのでしょうか」



「……………」

その妄想がリアルに目に浮かんでしまった。

「人なんてそうそう変わりませんからね。想像にたやすいことです。……ところで」

八雲さんはいったん言葉を切ると、じーっと私の目を見つめる。心なしか、声のトーンが微妙に下がったような気がした。

「貴女はことあるごとに、藤田サンの話題を出すように思うのですが……これは私の気のせいでしょうか？」

「気のせいです」

「いえ？ はたしてそうでしょうか？」

そう言うと、八雲さんはジリジリとこちらににじり寄ってきた。

「貴女はたびたび、その可憐な唇でまるで恋を叶える魔法の呪文のごとく『藤田さん……』とつぶやきますね。そのたびに、私の体内に潜む黒いマグマがボルケーノしそうになるのですがこれも気のせい吗？」

「気のせいです」

「おやおや……そうでしたか」

「わっ！」

いつのまにか、ほとんど隙間がないくらいに近づいていた八雲さんは、フツと笑って、あっさり距離をゼロにした。

私はなすすべもなく、彼の暖かい腕のなかに閉じ込められてしまう。

「では、すべての元凶は……、新妻を深く愛しすぎるがゆえに嫉妬という名のデビルを育ててしまった私にあるのでしよう」

「で、デビルって……」

レンズ越しに見える、色違いの美しい瞳。普段は理知的な光をたたえているその一対があやしくきらめく。まるで本当に魔物に見入られているかのように、頭がぼうっとしてくる。

「八雲……さん……」

「まったくもって困ったものです。貴女の瞳が映す、私以外のすべてのものが恋敵になってしまうとは……」

急に視界が回転し、遅れて背中にひんやりとした固い感触が伝わって、我に返る。はずみでスカートが少しめくれてしまっているはずだけど、今は、はしたない格好を恥じる余裕もない。

超至近距離から、この上なく楽しそうに私の表情を観察している八雲さんの瞳のほう

が気になってしまう。

「ふふ……っ。『女は非常に完成した悪魔である』との格言を残したのは、たしかヴィクトル・ユーゴーだったでしょうか？」

「さ、さあ……」

「だとしたら、貴女自身もデビルということになりますね。いたいけな紳士の胸をかき乱す、私だけの美しいデビル……」

（うう、またよくわからないことを……）

古今東西の格調高い格言も、八雲さんがうっとり口にするると、なんだか危険な響きに聞こえてしまう。

（真っ昼間の縁側で、いったいなぜ、こんなことに……）

どうにか抜け出せないかと焦って身をよじるけど、小さな努力はまったくの逆効果しか生み出さなかった。

「……どこに行こうというのです？逃げられる場所なんて、この家にはありませんよ。

今の貴女は、鳥カゴの中の鳥だということをしつかり自覚してくださいね」

まるで出来の悪い生徒に言い聞かせるようにゆっくりと告げる声は、陥落をそそのかす甘美な毒のようです。

「……はい」

私はついに抵抗を諦めて、八雲さんの背中にそっと腕を回した。

彼は『良くできました』と言わんばかりに、にっこりと笑って、私の首にキスをする。

「ふふ……くすぐったいですよ」

唇の感触があまりにもやわらかくて、私は小さく身をよじり、抵抗した。

そんな私を見下ろす彼は、どこか満足げだ。

「駄目ですよ、じっとしてくださいと。私の愛する小鳥サンを愛でている真っ最中なのですから」

(小鳥サンって……)

そんな言葉で、心までくすぐったくなる。

「その、はにかんだ顔も実にかわいらしい。……さては貴女は、小鳥のふりをしたデビルなのですね？」

真面目な顔で問われても、私はどう答えればいいのかわからない。ただただ顔が赤くなるのみだ。

「さあ……まずはなにから始めましょうか？ まだまだ時間はたっぷりあります」

まだまだ時間があると言いながら、八雲さんは、わずかな時間も惜しむように早急に

唇を求めてくる。

「まずは貴女にたっぷり口づけをしながら、

私がどれだけ貴女を愛しているかを……ゆつくりと語らせてはくさいませんか？」

次々と与えられる口づけに翻弄されながらも、私も自分の気持ちを伝えたくて、そつと唇を開いた。

「……貴女をずっと、愛しています。1000年よりも、もっともつと昔から……」

「……私も、ずっと、ずっと愛しています」

1000年後も、10000年後でも……。

こんなに居心地のいい鳥かごになら、永遠に捕われていたい。

そんな気持ちを込めて、私はもう1度、愛する人の唇にキスをした。

） F I N （